

研究テーマ

回復期リハビリテーション病棟におけるADL見守り患者の
「見守り介助」に対する思い

病 院 名

医療法人社団健育会 石川島記念病院

演 者

^{まついともこ}
○松井智子(看護師) 奈良美智子(看護師) 桜木美咲(看護師)
丸山恭子(看護師)

概 要

【研究背景】

病床の機能分化と再編が進む中、2000 年 4 月に回復期リハビリテーション病棟が開設。入院患者の転倒に関する問題は、リスクマネジメントの重要な課題である。転倒リスク要因^{1) 4) 10)}、予防ケアに関する研究^{1) 3)}、などが報告されている。しかし、患者の転倒リスクに対する考えや思いを聞いた研究はみられない。

【研究目的】

インタビューを通し、見守りに対する患者の思いを明らかにする。

【研究方法】

1. 研究デザイン：質的帰納的研究
2. データ収集期間：2020年 7 月～10 月
3. 調査対象者：MMSE20点以上の見守りが必要な患者
4. データ収集方法：半構造化インタビュー法。研究参加者の許可を得て録音する。
5. データ分析：録音した内容より逐語録を作成。抽出されたコードから、サブカテゴリ、カテゴリ、と抽象化。

【結果】

研究参加者は、8名で平均年齢77.25±5.97歳、主疾患は、脳疾患系2名、整形外科系6名、MMSE24.75±1.71点であった。データ分析の結果、患者が看護師の見守りに対する「思い」の構成要素として、コード99個からサブカテゴリ17個。カテゴリは【業務の大変さの推測からくる遠慮】、【周囲へ迷惑や負担をかけたくないという思い】、【過去の自己の行動、他者との比較、性格、補助具使用から来る自信】、【出来ることへの承認欲求】、【見守りの必要性の理解】、【転倒への恐怖転倒への恐怖】、【看護師の対応】、【人員不足】であった。

【考察】

1. 見守りが必要な患者の看護
本研究では、「見守り」に対する患者の思いに【業務の大変さの推測からくる遠慮】【周囲へ迷惑や負担をかけたくないという思い】

【転倒への恐怖】【看護師の対応】【人員不足】があがった。そのため、患者に声をかけられる前に、こちらから声をかけるような働きかけを行ったり、患者個々の排尿パターンの把握も必要と考えた。また、遠慮させない関りを私たち自身が心がける必要がある。

2. 患者自身の実際の身体機能の認識理解への援助

【過去の自己の行動、他者との比較、性格、補助具使用からくる自信】【出来ることへの承認欲求】【見守りの必要の理解】は、「出来るって思ってるからやってしまう」等の発言より、自分で出来ると考え行動した結果、転倒に繋がっていることが多い。転倒・転落に至った患者の思いを含めアセスメントする必要がある。「忙しいから」、「人手不足」で終わりにせず、「どこ」に問題があったか、「どうすれば」遠慮せずにナースコールを押すことが出来るのか、私たち看護師が振り返りを行うことが必要である。

【結論】

カテゴリ8個が抽出され、患者の見守りに対する思いを看護師側が理解した上で、患者に働きかけることが求められる。

【引用参考文献】

- 1) 高柳智子、泉キヨ子 脳卒中患者の移乗時「見守り解除」における看護師の臨床判断 — 中堅看護師を対象としたフォーカス・グループ・インタビューを通して 日本看護研究学会雑誌 Vol. 36 No. 2 2013
- 3) 泉キヨ子 平松知子 山田理恵 他 転倒予測における看護師の直観の構造と類型化 日看管会誌 Vol. 9. No2. 2006
- 4) 江藤真紀 久保田新 在宅健常高齢者の転倒に影響する身体的要因と心理的要因 日本看護研究学会雑誌 Vol. 23 No. 4 2000
<https://doi.org/10.15065/jjsnr.200009010>
- 10) 中谷真雄 回復期リハビリテーション病棟における転倒の要因 北海道看護研究学会抄録集平成28年度 92 - 44